

啓蒙の時代のヨーロッパにおける 歴史観・世界観の変容

大和高校 西 浜 吉 晴

一 はじめに

「先生、世界史って、なんの役に立つの」という生徒の問いに答えることは難しいことである。世界史の面白さの一端は現代とは異なるさまざまな地域、時代を知ることである。そうしたことを通して生徒は、現代の世界ではあたりまえだと思っていることが、必ずしも当然のことではなく、長い歴史の中から生まれたということを理解するのだと思う。その結果、歴史の現在を相対化し、生徒のなかに健全な批判力が育つことが高校の世界史教育のめざすべきことであろう。大和高校で「世界史の授業を受けて、世界の観方が変わったか」という質問をしたところ、「ヨーロッパとかアメリカなんて、まだまだ若宙さ」「国の囲いなんてアイマイさ」と書いた生徒がいた。これだけで充分なのかもしれない。生徒の批判力を育て、世界の観方を変えるためには、新しい視点による刺激的な世界史解釈の枠組みを生徒に提示することが重要なのではないだろうか。

従来の世界史の問題点としては、①ヨーロッパ史と中国史の偏重（一九世紀の西欧型知性と中華主義史観の合体）、②ヨーロッパをモデルとした「進歩」主義的歴史観、③トランスナショナルな視点を欠いた各国史の寄せ集め、④政治史・外交史の偏重と文化史の軽視などが指摘できるが、これらを克服した世界史像を考えていくことが大切なことである。

二 なぜ、啓蒙の時代のヨーロッパか

まず、歴史学がヨーロッパの啓蒙の時代の最後に成立したということは重要である。その歴史学が日本に導入され、現在の高校の世界史教育に影響を与えていることも事実である。また、ヨーロッパでは一六世紀以降、他の世界と遭遇し、一八世紀の啓蒙の時代に大きな知的変貌がおこった。そして、それは近代ヨーロッパの植民地支配を正当化する知につながっていく。そうしたヨーロッパの知が現代の高校生をも含んだ現代の人々に大きな影響を与えていることは否定できず、その知の枠組みを理解することは重要である。

三 啓蒙の時代の歴史観の変容

(一) 聖書に基づく人類史とその危機

紀元を定めるといふことは、歴史の始まりを設定するという意味で非常に重要である。三世紀にエウゼビオスは、創世（天地創造）紀元による歴史叙述を始めた。そして、六世紀にはディオニシウスがキリスト紀元を用い始めた。キリスト紀元は一〇世紀末までにヨーロッパに定着するが、イエス生誕以前のできごとは創世紀元で示すことが一般的であった。聖書に基づく人類史で最も重要なことは次の二つのできごとである。ひとつはイエス生誕約四千年前と考えられていた創世であり、いまひとつはイエス生誕約二千年百年前と考えられた大洪水である。聖書では大洪水の後にヨーロッパ人、アジア人、アフリカ人の先祖がきまつたとされている。

聖書では人類の歴史は、ただ一つの発生源（人類創造）から広がったという認識があったが、他の世界と遭遇し、他の世界を発見することで知的枠組みの変容が促された。すでに、エジプトの歴史の古

さや、中国の歴史の古さは聖書に基づく人類史を悩ませていたが、アメリカ大陸の「発見」は、それ以上の難問であった。聖書によればアメリカ大陸には人類はいないはずであった。その結果、一六世紀に教皇が「インディオも人間である」と認定し、彼らはアジアから渡来したものとして聖書の考え方を維持した。

その後、宗教改革を経るなかラテン語訳、ヘブライ語訳、ギリシア語訳の年代計算の違いから年代学論争がおこった。そして、一七世紀には、ベタヴィウスがキリスト紀元をキリスト生誕以前の時代に適用しはじめた。ここに、現在まで続く紀元前の考え方が生まれた。ただし、基本はあくまでも創世紀元であり、キリスト以前の年号は補助的・便宜的に使用されたものにすぎなかった。

(2) 啓蒙主義的歴史観の成立

ヴォルテールは『ルイ十四世の世紀』を著し、そのなかでギリシア古典文明、ローマ古典文明、ルネサンス、ルイ一四世の時代を重視し、それまでのキリスト教的な観方を離れ、理性を重視した進歩の段階を設定した。年号はキリストや主という言葉ははずしてキリスト紀元を使用し、紀元前も使用した。しかし、キリスト教的な時間を否定しても新しい表記を考えることはできなかった。

また、ヴォルテールは『歴史哲学』において、中国、インド、イスラームの文明に高い評価を与え、ヨーロッパを相対化し、フランスの現状の批判を試みた。世界史を「中国史」から始めることは、中国の古さを認めるとともに、大洪水の年代を否定し、キリスト教的伝統だけではなく古典古代を相対化することを意味した。

その後、シュレッツァーは創世紀元を否定し、過去に無限に伸びる時間を想定した。こうしてキリスト紀元はヴォルテールによって

世俗化され、キリスト教的時間はシュレッツァーによって否定された。その結果、不確定な創世から計算することがなくなり、古代の歴史的事実の年代がほぼ確定し、一九世紀の「歴史学の時代」をむかえる準備がなされた。

(3) 啓蒙主義的歴史観の展開

創世紀元を廃することにより、キリスト紀元は中性的・数学的年号になった。そうしたなか、コンドルセは創世も終末も排除した無限の時間を構想し、進歩・文明化史観をうちだした。彼によれば、神から解放された理性的存在としての人間は、狩猟↓遊牧↓農耕↓商業と法則的に進歩するとされた。また、マイナースは原始状態↓野蛮状態↓半啓蒙状態↓啓蒙状態という発展段階を想定した。いずれにせよ、世界各地の民族を人類史というひとつの時間軸にのせ、同時代の「未開」民族に人類の歩みの太古を重ねる試みであった。ヨーロッパ人による他世界の発見は、文明化された人類が「未開」な祖先からどのように発展してきたのかという議論に大きな役割を果たしたことになる。

ここにおいて、近代の植民地支配・オリエンタリズムへと続く「進歩したヨーロッパ―停滞したアジア―未開・野蛮なアジア周辺、アフリカ、アメリカ」という三重構造が成立する。ここで注意すべきことは、文明・未開(野蛮)の概念はヨーロッパ人が野蛮を開化、文明化へと引き上げようことを意図していたことであり、文明化された国民は文明化されていない人たちに対してある種の支配権を持っているという意識があったことである。「高貴な野蛮人」観や東洋趣味は称賛の名のもとに政治的支配を補完する役割を果たした。実際、ロココ様式におけるシノワズリーの流行は単なるデザインの際

用でしかないのではないだろうか。

四 啓蒙の時代の世界観の変容

(1) 一八世紀以前の世界観

中世においては、「キリスト教徒の世界―異教徒の世界―怪物の世界」という三重構造であつたが、ルネサンスを経て聖書（キリスト教）、ギリシア・ローマの学問に基づく世界観が成立した。その世界観では、イスラーム世界の諸帝国に対しては専制政治への批判が一般的で、中国に関してはイエズス会士の報告から高度な中央集権化、官僚制、長い歴史への称賛が見られた。アメリカ大陸は、ヨーロッパ人より劣っている奴隷が居住しているところであり、アフリカは、ヨーロッパ人にとって嫌悪感、優越感の対象であつた。

(2) 一八世紀のアジア観

一八世紀のヨーロッパ知識人が、アジアの特色とみなした点は二つあつた。一つはアジアの保守性・停滞性と不活発・怠惰なアジア人である。その原因としては専制君主体制とアジアの風土が指摘された。専制君主体制は、支配者と民衆の間に介在して進歩への指向性をもつ中間層が存在しないため進歩の芽を摘むと考えられた。また、アジアの風土は豊かな土壌であるため働く必要に迫られないように、暑い気候は働く意欲をそぐとされた。

いまひとつはアジアの「奇怪な」宗教である。イスラーム教に対しては一定の関心を示したものの、結局は進歩しない宗教であると考えられた。ヒンドゥー教は偶像崇拜であり、仏教も偶像崇拜の無神論であると考えられた。儒教は「天」を創造主とする一神教なのか偶像崇拜の無神論なのか、という議論が続けられた。いずれにせよ、

これらの宗教は人間の精神の情熱、自発性をゆがめるものであるとされたのである。こうして一八世紀末には、ヨーロッパ人にとってアジアは無知で偏狭な宗教心のせいで無知から抜け出せずにいる地であると認識された。その認識が「新しい商品や市場を開拓できるアジア」という帝国主義的思考に結びつくことになったといえよう。

(3) 一八世紀の中国観

「文明化」を国家的平和、経済的安定などと考えれば、ヨーロッパ人にとつても中国は文明化されていることを否定することはできなかった。一七世紀末には中国の皇帝直属の官僚による安定した統治、官僚が国民の倫理道德を律しているようすに対する称賛があつた。一八世紀においても、ヴォルテールなどのフランス啓蒙思想家は、フランスの政治社会、とりわけ、国王の独裁、特権貴族、教会の偏狭さに対する代替案として中国の支配体制に公共の福祉を見るなどした。（ただし、ヴォルテールにしても中国の科学・学問の停滞は指摘しているので、全面的な称賛ではない。）

しかし、一八世紀末には中国統治の安定性、皇帝の家父長制、公平無私の官僚というイメージが崩れる。その原因は中国に関する情報源が北京のイエズス会士から広州のヨーロッパ商人に代わったこととあるが、それ以上に、一八世紀ヨーロッパにおいて文明に対する考えが変化したことが考えられる。はじめ、文明化とは国家的平和、経済的安定などをさすという考え方が強かつたが、やがて、文明化とは自由な個人、自由な個人の行動様式、公共性をさすように変わったのではないだろうか。

(4) 一八世紀のアメリカ大陸の先住民観

一七世紀のイギリスでは北アメリカの先住民に対して、後の「野

卑な野蛮人」「高貴な野蛮人」につながる「残酷」「魂の平安」という二つの評価があった。フランスでは文明化を批判するルソーらは「高貴な野蛮人」を崇拜し、逆に、モンテスキューは先住民の専制体制を批判した。いずれにせよ、ヨーロッパの求める像を北アメリカの先住民に投影したという側面が強い。結局、一八世紀末には、イギリスでは悪意に満ち、狡猾であるという先住民像が定着した。

(5) 一八世紀の西アフリカ黒人観

ヨーロッパ人は黒人を優越感と蔑視のまなざしでながめたが、ヨーロッパ人から見て西アフリカの黒人については「皮膚の色」「奴隸制」という二つの問題があった。同じくらしい緯度のアジア人と比べて黒人の皮膚の色は黒く、このことを説明することは、アメリカ先住民の先祖を説明する以上の難問であった。奴隸制に関しては、その擁護論は、アメリカ大陸のプランテーションのほうがより良い生活ができることをその根拠にし、廃止論は批判の矛先を中間航路の惨状と西インド諸島のプランテーションに向けた。ここからも明らかのように、ヨーロッパ人のアフリカ自体に対する関心はうすく、アフリカの黒人に対しては批判的で、北アメリカの先住民に対してくだされたような称賛はなかった。

(6) 一八世紀の南太平洋諸島観

一八世紀の南太平洋を観る視点には、『ロビンソン・クルーソー』(二七一九)の視点と『ガリヴァー旅行記』(二七二六)の視点と表現される二通りがあるといわれている。『ロビンソン・クルーソー』の視点とは、南太平洋の人々に攻撃性、盗み、人食い、放埒なセクシヤリテイなどを見出し、野卑な未開人とみなす視点である。一方、『ガリヴァー旅行記』の視点とは南太平洋の人々を高貴な未開人と

みなす視点である。特にタヒチは、地上の楽園と夢見られた。このような野卑で下等な人々とみなす考え方と南太平洋の楽園伝説との対立は、一九世紀、二〇世紀のヨーロッパ人の南太平洋の先住民に対するイメージの基層を形成することになる。いずれにせよ、これもヨーロッパの側からの一方的観方といえよう。

五 啓蒙主義とは何か

(1) ヨーロッパの知の変貌

啓蒙主義とはヨーロッパの知の変貌であった。一五世紀までキリスト教的な人間観、歴史観、宇宙観が支配していたヨーロッパは、一六世紀に人文主義、「地理上の発見」(他世界と遭遇)を、一七世紀に科学革命、数学的合理主義を経験した。そして、一八世紀に啓蒙主義がおこったのである。啓蒙主義ではキリスト教的な人間観は否定され、自然的・社会的な存在としての人間について、新しくもつと人間的に、科学的に理解しようとする動きが出てくる。すなわち、聖書・教会・神学において保証されていた人間・社会・自然を理解するためのヨーロッパ思想が世俗化されたのである。その結果、従来の教会の教理、君主の絶対的な知恵にかわる、ものごとの新しい根拠・基準が求められた。それが、単一の普遍的な正義の基準である理性であった。

同時に、イスラーム、アジアなど非ヨーロッパ世界との関係が本格化し、異文化との接触が深まり、博物学、民族学、人類学の端緒が開かれた。信仰と科学のはざま、時間的・空間的な世界の広がり刺激され、知的好奇心が全面的に開花した時代であった。

その結果、知識と教育を媒介として、人類を無知と迷信と誤謬か

ら解放し、経済的繁栄、穏健な統治、宗教上の寛容、知的自由などを實現しようとする運動がおこった。したがって、さまざまな生活領域で変化が生じた。科学・テクノロジ―・生産活動が重視された。医学における悪魔の存在や死に際しての地獄は否定され、復讐・報復の刑罰から抑止・改悛の刑罰へと変わった。

(2) 文明批判と政治思想

このような啓蒙主義は、一面では、現実のヨーロッパ文明への批判となった。外国や非ヨーロッパ、「原始社会」や歴史などを用いて現実の社会・政治・文明を批判する方法がとられた。また、キリスト教的な価値観に対する否定から、ヴォルテールは理神論から無神論へと向かった。

しかし、啓蒙主義が政治思想として機能する場合、それは多面的にならざるを得なかった。一八世紀のイギリスでは代議制度、立憲政治、個人の自由、宗教的寛容、出版の自由がある程度、確立しており、ヨーロッパ大陸における「イギリス熱」をひきおこした。つまり、啓蒙主義者はイギリスでは現実の体制を擁護し、中央・東ヨーロッパでは君主にその運命を託したのであった。そして、フランスではもつとも不安定化し、革命へとつながっていくことになる。

(3) 近代ヨーロッパにむけて

一八世紀に開花した啓蒙主義は、世紀後半には宗教上の寛容、人権の自由、人間の自立、思考の批判的方法というものを自明なものとし、身分や宗教、性別などの社会的束縛からの個人の解放という考え方も出現した。しかし、反面、進歩と理性のもとに、現代にまで持ち越される新しい「科学的」差別がうまれたことも見逃すことはできない。たとえば、人種差別である。一八世紀末には「人種

の概念がうまれた。ブルーメンバッハは「コーカサイド」―「アメリカ」―「マレー」―「モンゴル」―「エチオピア」というヒエラルキーを想定し、身体的特徴に美醜の価値を付与し、知性や道徳性まであらゆる危険性を持ち込んだ。また、性差もそうである。一八世紀には身体的特色から性差がうまれた。マイナーズは男女の性差が出ることを進歩の証と考えた。そうした発想から、一九世紀には、ヨーロッパの宗主国と植民地の関係が、男性と女性の関係に重ねあわされることになった。

つまるところ、白人ヨーロッパ男性は「科学」の名において、世界の民族・女性を他者として、自由・平等から排除していった。そして、一九世紀の市民社会は、近代ヨーロッパの健全な白人男性が他者（女性、社会的不適応者、非ヨーロッパ人、前近代人）を排除する社会となったという批判がなされることとなる。

参考文献

- ロイ・ポーター・見市雅俊訳『啓蒙主義』岩波書店 二〇〇四
弓削尚子『啓蒙の世紀と文明観』山川出版社 二〇〇四
ウイリヒ・ハイム・ホーフ・成瀬治訳『啓蒙のヨーロッパ』平凡社 一九九八
- 岡崎勝世『聖書vs世界史―キリスト教的歴史観とは何か』講談社 一九九六
岡崎勝世『世界史とヨーロッパ』講談社 二〇〇三
P. J. マーシャル、G. ウイリアムズ・大久保桂子訳『野蠻の博物誌』平凡社 一九八九
- 山中速人『ヨーロッパからみた太平洋』山川出版社 二〇〇四
史学編『歴史学の最前線』東京大学出版会 二〇〇四